講演会　「国宝 後鳥羽上皇像と鎌倉時代の肖像画」

令和元年６月２日（日）

京都国立博物館　学芸部企画室研究員

井並　林太郎　氏

今回、「後鳥羽上皇像」の複製を資料館で作られたということで、実物と違わぬ大きさや色合いを感じとっていただければと思います。輪郭は細い線を重ねて描かれていて、毛の生え際１本１本まで非常に細かく描いている作品です。それでは、「後鳥羽上皇像」の歴史的な背景や美術史の中でどれだけ重要な作品なのかを紹介していきたいと思います。

後鳥羽天皇を描いた作品は、水無瀬神宮に、国宝「後鳥羽上皇像」と「後鳥羽法皇像」があります。さらに宮内庁にも「後鳥羽上皇像」があり、宮内庁三の丸尚蔵館蔵の「天子摂関御影」、徳川美術館蔵の「天皇摂関影」、京都国立博物館蔵の「時代不同歌合絵」などがあります。

まず、水無瀬神宮の国宝「後鳥羽上皇像」にかかわる文献を紹介します。『吾妻鏡』承久３（1221）年７月８日条、承久の乱で敗れた後鳥羽天皇が出家前の姿を藤原信実という絵師に描かせたと書かれています。これが現存する国宝「後鳥羽上皇像」に該当すると伝えられています。似たような記録が、『承久記』にもあり、同じく７月８日に、こちらは出家後の姿を描いたと記されています。さらに、後鳥羽天皇の霊託をまとめた『後鳥羽院御霊託記』には、天皇の俗体影と法体影が１幅ずつあったと記されています。次に、後鳥羽天皇が隠岐で、「時代不同歌合絵」を作られたと考えられているのですが、先ほどの『後鳥羽院御霊託記』に、「時代不同歌合絵」に描かれた自分の姿を水無瀬の御影堂に掛けて欲しいと後鳥羽天皇から霊託が下ったと記されています。また、和歌と後鳥羽天皇の肖像との関係として、宮内庁蔵の「後鳥羽院上皇像」を掛けた前で和歌を詠んだ事が分かっており、人麻呂影供の影響で生まれた後鳥羽院影供だと言われています。これらの後鳥羽天皇の肖像画をいくつか見ると、ほぼ同じお姿をされているので、元となる絵があったのでないかと思われ、それが国宝「後鳥羽上皇像」である可能性が考えられます。

平安時代の終わりから鎌倉時代には禅宗が日本に入ってきます。禅宗では肖像画を頂相とよびました。中国南宋の肖像画は、細部に至るまで入念な描き方をする作品が多く、日本でもこれに倣ってリアルな表現が行われるようになります。一方、平安時代の終わりから、俗人の見た目を描き分ける似絵が生まれます。これが頂相とともに興った、鎌倉時代の肖像画美術のもう一つの大きな流れです。

似絵の具体的作例に、「公家列影図」という、公卿の肖像画を描いた作品があり、細い線を重ねて個人の容貌をとらえています。国宝「後鳥羽上皇像」も細かい線を重ねて描かれているので似絵の作品の代表作と考えられています。鎌倉時代、宮廷の仕事は世襲でした。似絵も世襲によって受け継がれた技能で、その祖・藤原隆信は、平安時代の終わりから鎌倉時代にかけての人物です。『玉葉』という九条兼実の日記の中に、承安３（1173）年、後白河院の御所や、その妃である建春門院の御所に平野神社や日吉大社、または高野山に行かれた時の図が描かれたと記録に残っています。お付きの方も多く、隆信がそれぞれの人達の面貌を描いたと書かれています。これが似絵の歴史の